

令和5年度北海道子ども読書活動推進会議 議事録

○ 日 時

令和6年(2024年)3月18日(月)14:00~15:30

○ 会 場

道庁別館8階(札幌市中央区北3条西7丁目)

○ 出席者

【構成員】

表構成員、新津構成員、荒井構成員、片桐構成員、足立構成員

【事務局】

伊藤課長、五十嵐課長補佐(進行)、伊藤主査(説明担当)、横地主査、磯崎主事

○ 次 第

(1) 開会挨拶

(2) 自己紹介

(3) 事務局説明

- ・「北海道子どもの読書活動推進計画」〈第五次計画〉進捗状況について
- ・令和5年度の道教委の取組状況について

(4) 協議

(5) 閉会

○ 議 事

(1) 開会挨拶

【伊藤課長】 皆さんお疲れ様でございます。令和5年度北海道子ども読書活動推進会議の開会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、6年ぶりに参集での会議となりますが、皆様には、年度末の御多忙のところ、御出席をいただきありがとうございます。

また、皆様方には、日頃から、それぞれのお立場で子どもの読書活動の充実や読書環境の整備に御尽力いただいておりますことに、重ねてお礼申し上げます。

さて、本会議は、昨年度皆様方に御意見をいただき策定しました第5次北海道子どもの読書活動推進計画を踏まえ、北海道における子どもの読書活動の推進に必要な専門的事項について御意見をいただくために開催するものでございます。今年度は、計画を推進する初年度でもありますことから、進捗状況や、計画に基づき進めてまいりました主な取組について、御説明させていただきます。御参加の皆様には、それぞれのお立場やこれまでの経験などから、私どもの取組や、課題解決につながる方策等に対しまして、御意見をいただければ幸いです。

結びになりますが、今後とも、本道教育の充実・発展のため、引き続き御指導、御協力を賜

りますようお願い申し上げます、簡単でございますが、御挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(2) 自己紹介

【表構成員】 皆様お疲れ様です。社会教育関係ということで江別市情報図書館館長の表と申します。よろしくお願いいたします。もともと私は行政職員で、令和4年4月1日付けで、教育委員会の情報図書館の館長に就任いたしました。

子どもの読書活動推進画第五次計画ですけれど、都道府県の同様の計画は令和5年度から9年度ですが、市町村は1年遅れで、策定に係る委員として道立図書館の足立さんや市民の方の意見をいろいろ聞きながら令和6年度から10年度の5年間の計画を、何とか完成したところがございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【新津構成員】 北海道学校図書館協会で事務局長をしております、新津と申します。よろしくお願いいたします。私どもの協会では、学校教育の中での子どもの読書推進ということで、読書感想文のコンクールですとか、読書感想画のコンクールですとか、あるいは中学生の作文コンクール等の審査等の協力や優良図書の選定をしているところです。そして学校司書や、学校図書館の担当の教員などと協力して、図書館や読書の推進ができるようにということで、活動を進めているところがございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【荒井構成員】 一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事の荒井と申します。よろしくお願いいたします。次年度で17年目の活動でございます。北海道内の読書環境の整備支援を手がける団体として続けてまいりました。3年前ぐらいから、学校図書館の方に特に傾注して、今年度は今のところ、道内25校の学校図書館の整備支援ですとかアドバイスに回ったほか、子どもの読書活動推進計画が未策定だった西興部村と一緒に推進計画をつくりまして、この前出来上がりましたので、次年度から施行されます。どうぞよろしくお願いいたします。

【片桐構成員】 北海道子ども読書応援団の「風の子文庫」の片桐と言います。毎月何回か（江別市）情報図書館で読み聞かせボランティアをしたりしています。定期的に子育て講座などもして、週1回その「風の子文庫」で、子どもたちに本を貸したりしています。

【足立構成員】 道立図書館の足立です。よろしくお願いいたします。このコロナ禍を経て、子どもを取り巻く環境も変わったのかなというのを、ひしひしと感じているところです。それでも私たちも、学校現場に直接訪問する機会もコロナ前程度まで増えてきましたし、本の貸出しを通してということが多くなってしまおうのですが、学校の先生だとか地域の人達も巻き込んだ読書イベントなど、新年度の様々な事業の募集を全道市町村に向けてしているところです。どちらかという、いらっしゃる皆様の御協力をいただいていることが多い立場ではありますが、よろしくお願いいたします。

(3) 事務局説明

【北海道子どもの読書活動推進計画〈第五次計画〉の進捗状況について】

資料1・2 本計画

資料1の計画概要、及び資料2の6ページの「計画の体系図」をご覧ください。

本計画は、子どもの読書活動を社会全体で推進を図るためのもので、国や道において、読書バリアフリー法の施行や、GIGA スクール構想、地学協働の推進を背景に、2つの基本目標で読書活動の推進と読書環境の整備を目指し、家庭・地域・学校において5つの推進方策を定めたものです。

資料3 今年度の進捗状況と取組状況

1 ページ

<基本目標1>社会全体での子どもの読書活動の推進について

①「市町村立図書館等における啓発の実施状況」について

基準年の令和4年度の調査では130の市町村において「子ども読書の日」や「こどもの読書週間」に合わせた事業を行っていましたが、令和5年度の調査においては、132^{*}の市町村です。ポスターを掲示したり、子どもたちや保護者向けにお勧め本を紹介したりするなどの啓発事業でも取り組むことができるので、今年度は、より多くの市町村での実施に向けてはたらきかけてまいります。

※会議後に数値修正。

②「授業における学校図書館の活用状況」について

高校以外は基準年より増加しているところですが、学校司書からは、GIGA スクール構想が進み、学校図書館に児童生徒が来る機会が減っているとの声を聞いております。高校では探究学習が推進されているところですので、図書館資料も活用した深い学びによる探究が広がることを期待します。

③「学校図書館における様々な人材との連携」について

どの校種でも連携が進んでおり、特に高校で4.5ポイント増加しております。一方、下の表に記載しております、北海道教育推進計画の5―⑤の指標「読書活動に関して地域と連携した取組を行っている特別支援学校」は8.5ポイント減少しております。すべての子どもが読書に親しみながら、深い学びができるように、学校と地域のボランティアや図書館との連携が進むよう、取組んでまいります。

2 ページ

<基本目標2>子どもの学びを支える読書環境の整備について

①「公立図書館におけるアクセシブルな書籍等の導入状況」について

公立図書館・図書室においてアクセシブルな書籍やサービスの提供をしている市町村数についてですが、北海道図書館振興協議会による付帯調査であり、毎年同項目を実施する調査ではないため令和5年度には調査しておらず不明ですが、電子図書館につきましては、道内では十勝管内の芽室町、音更町、池田町の3町が増え、道立図書館のほか、17の市町で実施しています。

②「学校図書館におけるICT化の状況」について

学校図書館蔵書の電子管理についてですが、数値の訂正があります。5年度に道独自で実施した「学校図書館の現状に関する調査」で、4年度の状況になるのですが、中学が78.7%と記載しておりましたが、正しくは85.5%ですのでお詫びして訂正いたします。ですので、蔵書の電子管理につきましては、小・中・高とも微増でした。

③「学校司書の配置状況」について

小学校で微減、中学校は増、それから高校につきましては、道としてより大きな課題としているため、北海道教育推進計画の方で目標として定めており、参考までに4—⑤に記載のとおり、9.9%と2年前の2倍以上となりました。

ちなみに、教育推進計画では図書標準について記載しており、こちらは小学校、中学校とも少しずつですが増加しております。

3～4 ページ

○「学校図書館の現状に関する調査」（令和5年度調査：道独自）概要

【令和5年度の道教委の取組状況について】

・家庭や地域における読書活動を推進するための取組について

5 ページ～19 ページ

○「北海道子ども読書応援団」に登録している団体を紹介する広報誌『ゆめ*よみ』について

昨年度リニューアルし、各教育局から1団体ずつ概要や活動している内容を紹介しています。今年度は2回発行しました。現在登録団体は163あり、新規登録が16団体あったところですが、高齢化等により登録解除も11団体ありました。

20～23 ページ

○「子どもの読書活動応援イベント」（11月3日 札幌駅前地下広場）について

ボランティアによるおはなし会の実施や、青少年のための200冊やバリアフリー図書の紹介コーナー、高校生によるビブリオバトルなどを実施し、親子連れやビブリオバトルに関心のあ

る方など、約 300 人の方に、様々な読書活動等を体験していただき、バリアフリー図書等の普及・啓発を図ることができました。

24 ページ

○「子どもの読書活動応援動画」について

これは、北海道のプロスポーツチームの選手たちが、子どもたちに向けて本を紹介する短い動画を作成し当課の YouTube チャンネルで配信する取組です。動画の内容は、青少年のための 200 冊の中から 1 冊と、選手がおすすめる本 1 冊などで、幼児向けから高校生向けまで 18 の動画を秋の読書週間に向けて配信しました。各動画は、200～7,000 回の再生回数となっており、普段本を読まない児童生徒も読書をするきっかけとなることを期待しています。

25～28 ページ

○「北海道日本ハムファイターズ読書促進全道キャンペーン」について

夏休みに目標冊数を読んだ児童が、取組に参加している地元の図書館で、ファイターズの特製シャープペンシルをもらえる取組で、今回で 7 年目になりました。今年はエスコンフィールドへの試合招待もあり、参加自治体数 124、参加館数は 171 で、過去最多となりました。ただし、目標を達成する児童の率はそれほど増えておらず、キャンペーンに参加した児童の読書をさらに応援するような活動が必要とされています。

・学校における読書活動の推進にかかる取組について

29～36 ページ

○パンフレット「『主体的・対話的で深い学び』を支える学校図書館」について

学校図書館の運営体制の整備と利活用の促進に向けて、学力向上推進課と協働で作成し、9 月に市町村教委及び各教育局あて送付しました。校長が館長であることや、学校司書、司書教諭だけでなくすべての教職員が連携・協力し、学校全体で学校図書館の利活用を促進することが重要なことを示しています。

37～40 ページ

○リーフレット「情報活用能力の育成を支える学校図書館と ICT の活用」について

ICT 教育推進課と協働で作成し、3 月に市町村教委及び各教育局あて送付しました。GIGA スクール時代において、学校図書館も ICT 化を進め、紙とデジタル情報を効果的に組み合わせて児童生徒の情報活用能力を育成することを示しています。

どちらの資料も、来年度も引き続き、学校や市町村教育委員会の訪問時に活用してまいりま

す。

41～44 ページ

○「学校図書館担当職員講習」について

学校司書の養成や資質向上のために、学校司書や高校の事務職員、実習助手等を対象とした講習を今年度も実施しました。7月末の夏休みから10月にかけて、毎週Zoomで実施し、後日、録画をオンデマンド講習として、冬休みまで視聴できるように行った28時間の講習ですが、全道で49人に修了認定を行うことができました。昨年度の受講者からの報告で、今年度になって、校長先生が読み聞かせに参加をしてくれたり、学校図書館にWi-Fiが整備され、国語と道徳の教科書も配備されたりするなど、着実に図書館が良くなってきているという嬉しい講習の成果を聞くことができました。

来年度は、オンデマンド講習の受講対象者を広げるなどし、学校図書館や学校司書の必要性についての理解がさらに深まり、学校図書館の利活用が促進されるような方法を検討してまいります。

45～46 ページ

○「道立図書館の学校向けサービス<小・中学校版>」について

道立図書館では、市町村の図書館・図書室に対して資料の貸出しや運営相談などを行う支援事業を行っておりますが、学校図書館への支援も行っております。

こちらのリーフレットは小・中学校版ですが、高校・特別支援学校版もあり、どちらも、学校図書館の環境改善や講師派遣事業、体育館などでイベントを行うブックフェスティバル、蔵書の少ない学校図書館へ資料の支援貸出しなどを行っています。また、学校として利用登録を行うと、道立図書館の電子書籍が利用できるようになり、試験的に道立高校1校で全生徒の登録なども行っているところです。

道立図書館の今年度の学校図書館支援事業の内容については、足立企画主幹に補足を申し上げます。

【足立構成員】 道の計画、それから道立図書館の計画も、今年度の4月から切り変わったということで、今ご覧いただいているものは、4月から比べると、新年度向けにリニューアルしたものです。基本的に、新年度4月以降も、今年度を引き継いだ形で支援事業は行う予定であります。細かいところだと、サポートブックスの「図鑑セット」というところに、New というのが入っていますが、中学校版なのでそこしか線は引いてないのですが、隣の事業貸出しでは未就学の子向けの赤ちゃんえほんセット、それから高校生をターゲットとした高校生向けセットというようなものも、試験的にセットを組みまして、お勧めできるものとして今準備をしている

ところでは、ちなみにこの「図鑑セット」というのは、長年、道立図書館にアンケート等でリクエストが寄せられていたところで、今回、我々もお金をやりくりして念願叶ってある程度数を揃えることができたのですが、おかげさまで、来年度の貸出はすべて埋まってしまうほど人気がありました。また、教科書も改訂ということで、国語の教科書セットも多少中身を入れ替えましたら、やはりそちらの方も、小学校等から反応が良くて、リクエストが多かったです。そういったニーズをとらえて、今度やっていきたいと思いますが、皆さん方から意見をいただき、それを反映させながら、より良い事業をつくっていきたく思いますので、よろしく願いいたします。

【伊藤主査】 以上のような形で、本庁の色々な事業や、道立図書館の支援などを合わせて、北海道の子どもたちに支援をしているところです。それから学校図書館の整備状況につきましてはまだまだ進んでないことがありますので、机の上に置かせていただいた、「地学協働」という当課で毎月発行している広報紙の一番最後のページに、資料が充実している学校や、学校司書が子どもの読書活動支援している事例など、掲載しておりました。これは社会教育課のホームページの方にも掲載しておりますので、お時間のある時にでもご覧ください。今年度の進捗状況及び取組については以上です。

【五十嵐課長補佐】 令和4年度に丸1年かけて、この会議の構成員であります皆様方から策定の際にいろいろ御意見をいただき、それらを踏まえて策定することができました。その計画の初年度ということで、取組を進めてきました。せっかく計画を作ったからには、しっかりと目標に向かってやらなければならないということを意識しながら、担当の方からも説明したんですけれども、色々な団体と連携しながらイベントを組んだり、学校図書館の充実には、やはり管理職の方々の理解が必要だということで、管理職向けのパンフレットを作ったり、例えばICTとのベストミックスということも必要ですので、関係する課と連携しながら、リーフレットを作ったりというような取組を一年間やってきましたので、その結果が今回数字に表れているかどうかというのは微妙な部分もあるんですけれども、皆様方から御意見をいただきたいということで進めたいと思います。

(4) 協議

【新津構成員】 今の基本目標1のところの①ですけれども、市町村の実施状況とかですね、令和3年度・4年度の数值より、コロナが5類に移行した後の状況が、数字が下がっている※ってところについては何か原因って言いますか、こういうことが理由としてあるのではないかと押さえているものがありましたら教えていただきたいんですけれども。

※会議時の配付資料ではR5の状況が「120市町村」となっていたため。

【伊藤主査】 原因がわからないんです。

【足立構成員】 この120という数字はどこからですか？

【伊藤主査】 読書推進運動協議会のピンクの冊子から、市町村の数を数えています。

【足立構成員】 すいません。なぜそういった質問をしたかというところ、これのとりまとめは、北海道読書推進運動協議会事務局である道立図書館がやっているんですけども、道立図書館から全国本部に報告した数は、道立図書館を除くと132なんです。ですので、多分本部の方の判断で、もしかしたら、省かれたものがあるのではないかと。令和5年は道立図書館を除くと132で、令和4年度も132で報告をしているんです。私もすいません。ピンクの冊子を数えてはいなかったです。

【伊藤主査】 今年の方が、より省略されているということですかね。

【足立構成員】 令和3年は126ですね。このあたりももしかしたら、本部の方で選別しているかもしれません。ただ、この120かもしれないし、130かもしれない中には、先ほど事務局の方からもあった通り、ポスターを貼りましたとか、市の広報に本を紹介しましたというところから始まって、お話をしたり、ゲーム大会をしたりとか、あるいは人を招いてやりましたとかっていうところまで千差万別、いろいろあるので、我々としても、やっていませんというところには働きかけはしているんですけども、だからあんまり一喜一憂できないかというところか。

【表構成員】 当図書館においてはポスターの掲示や特集コーナーでのPR等実施しています。館内に何かスペース等があれば、ポスター掲示など簡単なことでも何かできるかなという気がします。

【足立構成員】 新年度の（読書週間の）ポスターは道立に届いたので、市町村に発送するため、一生懸命四つ折りしているところです。

【五十嵐課長補佐】 それすらやっていないというところが、5、60の市町村でまだというような結果がありますので、これは普及啓発しながらと思います。今回の道教委の読書イベントも、市町村に「やってください」というだけではなく、まず道教委自身が汗をかいて色々やってみて、「こんなことやったら楽しかったですよ」、「こういうふうにやればいいですよ」というような、一回やってみてそれを全道に伝えていきたいということで取り組んだもので、そういったものを色々やり、試行錯誤しながら、数字については上げていきたいなというふうに考えています。

【表構成員】 ただ、図書館ない地域はなかなかできないというところか、図書館がないと、なかなかやるのはきっかけづくりとかが難しい。

【五十嵐課長補佐】 ただ図書館がなくても公民館図書室があるかと思うんですよね。図書室は100%あるんですよ。手狭なところもあるかと思いますが、そういったことも意識して啓発してまいります。

【伊藤主査】 ほとんどの町で子どもの読書推進計画は作っているのだから何かしら

やっていただきたいと考えています。

【表構成員】 その計画のなかで本の数を増やしたりとか、読み聞かせだとかボランティアだとか何かできると思うし、そういった形で必ず項目はあると思います。

【五十嵐課長補佐】 その他いかがでしょうか。

【表構成員】 私どもの市でも推進計画をつくっていて、いろんな割合や指標で、当然教育長とか議会にも報告するので、指標が増えている減っているのは、私も本当にどきどきしているところです。令和3年・4年というのは、コロナの影響で減ったかっていうのが理由にできるんですけど、これからはそういう理由が使えませんので、令和5年以降は、今までと違ったようなイベントだとか、本のような予算がかかるハードじゃなくて、読み聞かせの回数とか、子どもたちが本に触れられるような機会を増やすだとか、コロナ前と違ったような形を考えていかなきゃならないかなということがあります。学校図書館については、学校教育課という違うところで所管していて、本は毎年、何百万とか予算がついて充実はしているんですけども、文部科学省の方でいろいろ基準があって、特別支援学級一つ増えただけでも300冊400冊増やさなきゃならなくて、300冊買うといったら何十万100万ぐらい予算増えるとので、本を買って充当率を上げるというのは、予算の関係で厳しいなと思っております。

【五十嵐課長補佐】 ほかはいかがでしょうか。

【荒井構成員】 2ページの、4-⑤の高校の学校司書の配置ですけれども、令和3年の4.7%から令和5年が9.9%ということで、増えているんですけども、一方で3ページの人的整備、学校司書の勤務形態で、高等学校は、令和4年が常勤非常勤足して25人、令和5年度になると20人と、今年度になって5人減っているんですね。昨年から今年、でこぼこはもちろんあるんでしょうけれども、この流れの中で、この第5次の終了年度に50%にどうしたらなるのか、もし何かロードマップといいますか、今から手がけることがあれば教えて欲しいんですけど。

【伊藤主査】 高校につきましては、12学級以上の学校に図書を担当する職員が定数の内数で入っています。それで、学校図書館担当職員講習というのをやって、今は本の購入事務ぐらいしかできてない事務職員の方や、あとは実習助手の仕事もありながら、図書館を担当している方もいると思うんですけども、そういった方たちに、本来学校司書というのはこういう仕事が望まれるんですよという講習内容でやっています。学校司書の仕事を理解していただいた上でその学校図書館にかかる時間なり職務なりを増やしていただくことで、「学校司書を配置している」と答えられる学校を増やしていく算段でおります。ただ、別な事務もある中で、1人の力で学校図書館をすべてやるというのは大変なことです。司書教諭の先生がいたり図書担当の先生がいたりするのが、学校だと思しますので、チームで学校図書館の運営の方を促進できるように、学校司書の配置の有無というよりも、学校図書館の利活用の促進の方を目的に、講習の方を進めているところです。

【荒井構成員】 令和5年度の状況の20人というのは、実習助手さんだと考えていいですか。

【伊藤主査】 教諭を除く、身分としては実習助手と、事務職員もいます。今まではそのこの区別も曖昧で回答していた学校もあったかと思うのですが、今年度からはきっちり徹底して事務職員、実習助手で、学校司書としてカウントされている人数です。

【五十嵐課長補佐】 正直かなり厳しいです。今担当の方から話したとおりですが、100%配置されているような県がいくつもあるので、そこに電話をかけて状況を聞いたり、どのようにして100%にしたのかというようなことも色々聞きながら研究しようと思うんですけど、「学校司書がいるのは当たり前」というような答えが返ってきてしまうと、どうしていけばいいのか、意識の部分の違いがあったり、なかなか難しいなというところがあります。我々の課としては、講習を充実させたりですとか、学校の先生方に学校図書館なり学校司書なりを理解していただくようなところを、地道に進めていきながら、増やしていきたいという考えです。

【荒井構成員】 あともう一点すみません。もしわかれば教えていただきたいんですけど、去年の6月に文科省で、学校図書購入費の方で、2021年度は全国で57%の予算措置ということですが、これの北海道分というのは今わかりますでしょうか。

【五十嵐課長補佐】 これは、わからないんですよ。文科省に確認したのですが、全体の歳入歳出っていう部分はわかるんですけども、文科省でも都道府県なり市町村なりの個別が何%なのかというのは、出すことができないという話なんですよ。

【荒井構成員】 都道府県の調査から出したわけじゃないんですよ、57%というのは。

【五十嵐課長補佐】 57%は、国の約6割という数のことですよ。

【荒井構成員】 そうですね。文科省の予算措置の100%に対して、各自治体でなべていったら57%となった。ですけども、これは文科省がすべての自治体に直接調査するとは思わなかったもので、都道府県の数値を挙げてきてそれをならしたのかなと思って。であれば、道の方は道の方で、数値が出てるのかなと思ひまして。

【伊藤主査】 道を通して決算はとりまとめており、市町村それぞれの図書と人の配置にどれだけお金をかけたかはわかるんですけども、そもそも国が各自治体にそれぞれいくらずつ払っているのかがわからないので、実際の%まではわかりません。

【荒井構成員】 なるほど、了解です。

【五十嵐課長補佐】 ほかに、いかがでしょうか。

【表構成員】 先ほど事務局から学校図書館の司書の配置は管理職の理解という説明がありましたが、確かに私も情報図書館は、教育部の中の情報図書館であります。また、現場の学校図書館の司書からは、「館長、忙しいんで何とかならないですか」という話を聞いて、司書の待遇改善を部長には話をしています。部長も理解しているが、地方交付税措置されていると言いつつも明確な補助とはなっていないため予算措置は厳しいです。議会でも充実せよと言われてい

るので、江別市では昔は3人だったのを、私が来てから1人増やして4人の巡回司書の形で配置していますが、毎年1人増やせるわけではない。私の力不足で申し訳ないんですけど、予算的な話で、毎年1人増やすっていうのはなかなか難しいと思っています。ただ、読書計画にも、学校司書の充実って書いているわけだから、これは毎年増やせなくても、3年に1人だとかね、5年に1人とかって、計画的に増やしたいですね。例えば学校にも道の予算で学校事務員さんとかいるので、そういう措置があれば、みたいな話を（部長に）チラッと言われて参りました。ちょっと内部的な話で申し訳ないですけども。市町村によって色々違いはあると思うんですけど、江別市はあまり裕福な自治体ではないのでそういう事情があります。

【片桐構成員】 その話で、学校司書さんのお話を聞くことがあって、やっぱり子どもの読書を進めるに当たって、大人の手助けが必ず必要だと思っていると話していました。やっぱり大人が読書の道しるべになってあげないと、子どもの読者は推進していかないから、ぜひ学校司書さんを学校に置いてほしいなと思っています。

【表構成員】 学校にも図書委員とか担当の先生がいるんですが、忙しいから図書室に行けないと言っていました。今だって図書館司書が巡回しているときは子どもたちが好きな時間に行っても入れるけど、司書が行ってないときは学校の委員とか担当の先生が図書室の鍵を閉めてしまって借りられないという話は現場の司書からは聞くんで、やっぱり配置するだけでも、子どもたちが図書室に行って、何でもいいから本を手取るだけでも、いいかなって。司書は当然配置だとかバランスだとか、綺麗に飾り付けとかをすごい頑張ってる司書もいるので、子どもたちが部屋に来てもらえるだけでかなりきっかけづくりになる気はいたします。

【五十嵐課長補佐】 基本目標1の③の「公立図書館や様々な人材と連携した取組を行っている学校の割合」ということで、これは少しずつ増えてきてはいますし、コロナで落ち込んでいた部分が、またコロナが明けて、いろいろと外の地域の方々と、連携しやすくなったのかなというふうに思うんですけど、この辺りは片桐さんいかがでしょうか。

【片桐構成員】 公立図書館との連携ですか。学校図書館に地域の図書館の司書さんがいてブックトークしてもらおうとか。あと地域の本屋さんが、学校の中に入って、本の話をするとか、聞いたことがあったので、そういう色んな取組ができるんじゃないかなと思います。

あと、学校に学級文庫が、もっと活用されていいかなと思います。学校もよく行くのですが、学級文庫が置いてあるけれども、この学年にこの選書はどうなんだろうと思うことがあります。先生がずっと持ち歩いてきた本を置いてるんじゃないかというのも結構あったりするんで。江別市は、中央図書館の司書さんが回っているところは、きちっと学級文庫も素晴らしい選書で置かれているんですけど、担任の先生に、こんな本を置いたらいいんじゃないですか、というようなりストもあったらいいなと思いました。気付いたことなんですけど。

【五十嵐課長補佐】 ありがとうございます。話を聞くとやっぱり、学校司書のような、そうい

った職員が中心になって、外部との連携を図ったりとか、先生方との連携も図ったりとか、つていうようなことをすると、学校図書館が利活用されたり、整備が進んだりっていうような形になりますよね。

【片桐構成員】 学校司書がいるといいというのはわかってるんですけどね。そこがうまくいけば本当に素晴らしいと思うんですけど。

【表構成員】 繰り返しになりますけど、恵庭市は学校司書がいるので、恵庭から来たある学校の教頭先生からは、江別は学校司書いないのって言われたんですけど、江別市で頑張ってる先生もいるんですが、私は教育委員会に来てやっと2年たったんですけど、「学校が忙しいから、図書館のことをやりたいけれど、当然担任もあったり、あんまり言っちゃいけないかもしれないけれども先生方も30人いるところが1人2人休んだりなんかしたら忙しくなって、なかなか大変で手が回らない」という話も聞きますし、いろんな事情があるというのは私も立場上伺っているので、その辺のバランスを考えながら取り組んでいきたいなと思います。

【五十嵐課長補佐】 基本目標2の「子どもの学びを支える読書環境の整備」、2ページ目の方いまして、3つ指標があるんですけども。まさに今言っていた、司書の配置もありますし、バリアフリーということでアクセシブルな書籍の導入状況ですとか、学校図書館のICT化の状況はいかがでしょうか。

【新津構成員】 蔵書の管理は、私は札幌市の学校なので札幌しかわからないですけども、電子化といいますか、それはできてると思うんですけども、それ以外のところというのは、うまくできているかどうか定かじゃないですよ。本来はですね、図書関係の職員がICTの方も長けてたりすると、そういった状況が改善されたり良くなっていくようになったりしていくかなと思うんですけど、実態としてはなかなかそうではないことが多いかなと思います。

【五十嵐課長補佐】 今我々は令和9年までに100%ということで考えていて、そういった電子化されてない学校ってというのはどんな感じなんでしょう。あと15%。高校はあと3割、小・中学校でいくと15%ずつぐらいつつなんんですけども、昔のカード方式で、でしょうね。

表館長はバリアフリー関係の書籍の要望はされているのでしょうか。

【表構成員】 学校図書館はわからないですけど、市の図書館には目の不自由な方がわかるように点字だとか、カセットテープだとか、あと弱視の方には大活字本とか字の大きなものは置いております。ご存知のように、数年前に法律の関係もあったりして整備はしてはいるんですけど。あと、広報紙を録音している団体もあったりして、そういう方が活動して、テープだとかCDだとかにして貸出しています。学校図書館の本の電子化の方は、十年ぐらい前ぐらいに予算がついてシステムで貸出はできています。昔は裏表紙のところに封筒を貼ったカード式で、ある小学校に行くと昔の名残の本はあったりします。一応システム化はやってはいるんですけど、本当は5年でシステム更新されるのですが、予算の関係でなかなかうまくいっていな

い。

【五十嵐課長補佐】 ちなみに、この指標とはちょっと違うんですけども、今、6年度からの市の読書計画をつくっているということですけども、我々も子どもの視点に立ったサービスってというのは割と重点的に考えて、それもアクセシブルな部分も、もちろん子どもの視点に立ったサービスということで、とらえながら進めているんですけども、市の方でも、そういったものは、内容に入れているのでしょうか。

【表構成員】 江別市では、乳幼児の健診のときに、健康福祉部って違う部局の方の事業で、2冊本をプレゼントして、きっかけづくりですね、お話会とかもやってるよと図書館に来てもらう形でPRしています。市庁は子どもの方の予算も結構ついたりする。そんな形で計画は作っているところですよ。江別市情報図書館には今、令和4年度で、大体10万飛び7000冊ぐらい児童書があるんですけど、それを少しずつ予算を付けて増やしています。本の値段は、昔は1000円ぐらいでしたけど、今2,000円、2,500円ぐらい。予算が10万あっても、買える本数が全然。図書館用は、表紙を堅くしなきゃいけないので、1冊3,000円とか普通にしていて、本当に本の値段も上がっております。

【五十嵐課長補佐】 いかがでしょうか。あとは、全体を通して、今、資料2ページ目3ページ目をご覧いただきながら、その方が、参考として、道全体がその教育推進計画の指標もあげさせていただいてるんですけども、この辺も含めて、お気づきになられたこととか、これに関わってこんな実践していますよというものがあれば教えていただければありがたいなと思います。

【片桐構成員】 「幼児教育の充実」っていうところですが、小さい子に週に1回か2回、公民館で読み聞かせのお話会をしているんですけど、今の状況をまずお話しすると、コロナがあったので、ブックスタート事業とかお話会のイベントとかは再開されたんですけど、5年ぐらい図書館に行けなかったりとか、活動をやらせてもらっても、時間を短くとか、人数を少なくとか、参加できる子どもの数が少なくなった影響で、お話会に来る子どもたちが、イベントが再開されてもぐっと少なくなってきて、どこの市町村もきっとそんな感じで、今まで一生懸命ブックスタートから朝読からいろんなことをして積み上げてきたものがちょっと分断されたような状況に今なってるなあとあって、それをまた、徐々に徐々に回復させているという状況で。

そんな感じでやってるんですけど、今のお母さんたちはやっぱり、コロナの影響もあるし、あとSNSの発達もあって、何でもネットで検索して子育てで困ったこととかも全部検索して解決していくみたいな感じで、昔みたいにママ友みたいなのをつくったりしないんじゃないかなあっていうふうに思います。お話会についても、1人で来ているお母さんたちばかりで、昔は結構、仲間に来てわいわいわいわい、ママ友同士楽しそうだったんですけど、子どもと親と1人ずつで来ていて、来ても、影響がまだ長引いてるのか、お母さん同士話をしない。孤

独な感じなので、もっとイベントを活発化させて、読み聞かせの場所が、子育てのコミュニケーションの場になればなと思っています。働くお母さんも多くって、0歳児から子どもを保育園に預けられるので、そういうところもやっぱり仲間づくりがだんだん大変になって来ているのかなあって思っています。だから、もっと読み聞かせが市町村で活発に行われてほしいなと思います。

でも、読み聞かせのボランティアの方も、ここ何年かで大分高齢になっていて、昔から言われてるんですけどなかなか後進が育たなくて、江別市もそうなんですけど、だから違う市からわざわざ来てもらったりとかしていて、そういうのもやっぱり市町村の方たちで、育成してもらえるように、働きかけていただきたい。その場合、江別市は図書館から指導していただいているんですけども、図書館だけではなく、保健センターだったり、子育ての関係の子どもの成長のお話の研修を受けさせてもらえたらいい。あと生涯学習課の方たちにそういう色々な他方面からの研修を受けさせてもらって、ボランティアを自信を持ってできるように、育成してあげてほしいなと最近すごく思います。

【五十嵐課長補佐】 片桐さんのお話を聞いていると、コロナのせいにはできないっていうのはもちろんあるんですけども、コロナの後遺症みたいなものっていうか、この期間でなんか分断されちゃうので、それを元に戻すのはやっぱり大変なところがありますよね。その辺は、やりながら研究しながらっていうか、そしてまた考えながらやっていく必要があります。足立企画主幹、全体を通していかがでしょう。

【足立構成員】 北海道は広いっていうのが、言い訳になってしまっただけじゃないんですけども、格差があることは、もう皆さんご存知の通りで、なかなか隅まで目も届かないし、手も届かないというのがあります。ちょっと何点か関連はしないですけど、例えば、基本目標1の②のところの「授業における活用状況」について、我々は「困っています」という学校にお伺いして、じゃあ本の並び方から、っていうような機会が年に何回かあるんですけど、それではきちんと活用できるところってどういう活用しているんだろうっていう視点もありまして、先日道教委で行った「探究チャレンジジャパン」という、高校生の探究学習の選抜された子達の発表会に道立図書館職員何人かで視察させてもらって、パネルディスカッションやオンラインでの発表を聴く機会がありました。ある程度予想はしていたところなんですけど、「探究学習です」、「道の代表になって上がってくる子たちです」と言っても、いわゆる我々が想像するような「調べ学習」、本を読んで、先行事例を研究してというような道筋をたどっているかっていうと、残念ながらそういう子は一握りで、今はネットだったり、あるいは人材活用っていう意味ではいいのかもしれないですが、職場体験のような形で、地域の人とかと一緒に活動する、つまり人から聞いて、現場で学んでいくっていう方が優先されていて、本を調べましようとか、自分の前に同じような疑問を持った人はいないのかしらっていう、文献を読んで調べるって

う部分は、なかなかまだ、子どもたちはもちろんですけども、指導する先生方にも、視点が抜けてしまってるのか、それともご負担になってるのか、理由はわからないですけども、行き届いてないなというのを痛感したところです。ですので実際、具体的な道筋が見えているわけではないんですけども、道立図書館としても、できればモデル校のようなところを決めて、探究学習にもテーマを決めるあたりから本を提供したり、本の活用を案内したりというようなことで、活動を一緒にできる学校があればいいなというところは、職員間では、話し合っているところです。なかなか活用してねとは言っても、活用するスキルというか、フォーマットというか、そういうのは学校現場も難しいのかなというところは、感じたところです。

それから特別支援教育の話で、先ほど、人材連携で学校として高校は上がっているけれど、特別支援になると、実施状況のパーセンテージが下がってしまうという話になりましたが、道立学校の方は、特別支援学校から毎年必ず1、2校からは、声をかけていただいていると思います。皆さんご存知の通り、支援学校となったとたんに、いきなり抱えている子どもたちの年齢幅が広がってしまう。小学部から高等部まである。誤解はないようにお願いしますが、彼らの学力の面であったりとか、あるいは体の機能の問題で、通常の我々がイメージしている図書室ではとても利用できないという現状もあったりして、ちょっと特殊な工夫が必要だということも我々も研究というか勉強していかなくちゃいけないなというところは常々話しているところです。そういうこともあってなのか、なかなか町の図書館、自治体の図書館との連携が二極化しているというところがあるようで、うまく連携がとれていて、特別支援学校にも自治体の手が入っているところもあれば、いや全くおつきあいがございませぬ、本当に陸の孤島というか、特別支援学校が孤立とまではいかないまでも、寄宿舎があったりする場合もあるので、一種の特別空間のような、独立した空間のようになってしまっているところもあったりして、目を離してはいけない部分だなと思います。

あと、最後ですが、学校司書の配置のところは、私も道教委の一員として、皆さまの御意見については、明日は我が身なので、非常に申し訳ない部分もあるのですが、配置状況は決して高い数字ではない、しかもさらにそれを掘り下げていくと、さっき江別市さんの方は1人増員したってというような嬉しい報告もありましたけども、やはり兼任で1人の方が、市内町内全部回ってます。そうすると週に1回、しかも数時間しか行かないので、壊れた本を修理して、新しく入ってきた本のカバーを付けたらもう終わっちゃうの、っていう声も聞いたりしますので、その辺りはもっと子どもたちと触れ合う時間じゃないですけども、そちらの方に、決して事務作業に行くのが学校司書じゃないと思いますので、そういうところはもっと手厚くなればいかなと思っています。あと先ほど、ちょっと関連する話もありまして、司書教諭だったり、学校図書館担当の先生。これも兼務といいますか、他のいろんな事務分掌と合わせて図書館がその中の一つとなると、ちょっとこの後は想像になりますけども、司書教諭発令を受けた先生がそ

の分、担当する授業数の配慮を受けているかということ、恐らくないのではないかと思います。そうすると通常の業務をもって、中高の先生なら部活動もあって、自分の担任する子どもたちの世話もして、保護者の対応もして、図書館もってというのはやはり現実として厳しいところがあるのかなと思っております。管理職の先生にはちゃんと実態と結びついた発令配置で、しかもそうなった先生が、力を発揮できる現場ってというのができたらいいなと思っております。すみません、道立図書館の立場を離れて発言してしまいました。

【五十嵐課長補佐】 ありがとうございます。事務局から何かありますか。

【伊藤主査】 あとは学校の現状につきましては荒井さんもいろいろ、今年度回られたということだったんですが、何か気になったことはありましたか。

【荒井構成員】 義務教育学校が、今、北海道増えてますが、義務教育学校の学校図書館をどうつくったらいいかというのを何件か聞きまして、すでに先行事例をしてできているところで、素晴らしいところもありますし、あり得ないだろうっていう図書館の造りをしている義務教育学校もあります。ですので今全国の事例を今集めてるんですけど、あんまり役に立たないんですよ。北海道は義務教育学校ができる理由が首都圏と全然違うんですから。ミニマムで維持できないので義務教育学校になるので。だからといって、雑に作っていいという話ではないんですけどね。色々昏々とそういう話をしましたら、わかりましたっていうことで委員会で総務・企画の方でやってみますという話がありました。ただ、先行していいのも北海道でも結構あるんですよ。そこをまず見ていただきたいなあと。それを見ればすぐわかることなんですけどね。できればそういった義務教育学校がこれから増えてくるように、案内とかそういった先行事例ですとか、戦略的に、ぜひいい事例を紹介していただきたいなあと思いました。

【五十嵐課長補佐】 ちなみに、あり得なかったのはどういったところですか。

【荒井構成員】 大人も中学生も小学生も同じものを使うのは法律違反ですよ。学校図書館法と、図書館法と違うわけですから。びっくりしました。僕だけじゃないです。いろんな方がびっくりされて、道新がかなり持ち上げていたので、それを標準にせよということになったらとんでもないことになるので、そもそもコレクションの方針も運営の方針も、教育的配慮も全部違うわけですが、小学生と中学生に同じ棚を使わせるっていうこと自体、ありえないことが起こるなと思いました。

【片桐構成員】 もっとボランティアの人を学校も上手に使ってやってほしいなって。先生たちそんなに大変だったら、お母さんたちに、力貸すよって人はいっぱいいると思うので。標茶にある中学校で、おはなしボランティア、標茶町図書館のお話ボランティアさんですか。「結〜ゆい〜」というところがあるんですけど、その中学校のお昼の校内放送に、読み聞かせを放送で漫才師のエッセイとか、あと、マタギと熊の闘いの話とか、『13歳のハローワーク』とか、そういう本を読み聞かせるって。面と向かってじゃないので、中学生だし、「校内放送でやっ

てみたら」って校長先生が言ってくださったみたいで、それで1年間やってみたんだっていう方がいました。そういうやり方もあると思うので、ぜひボランティアをどんどん活用してください。応援団は待っています。

(5) 閉会

【五十嵐課長補佐】 われわれも子ども読書応援団をしっかりと充実させたりとかですね、活動が活発化するような支援をさせていただきたいと思っております。

ほかになれば、これで会議を終了させていただきたいなと思うんですけど、本日皆様方からいただいた御意見を、しっかりと、企画に反映しながら、これからも取組を進めていきたいと考えております。

来年度も、3月に会議を予定しております。その時には、しっかりとこの数値、いい数字を皆様方に見ていただきたいなというふうに考えておりますので、引き続き御指導のほどどうぞよろしくお願いいたします。

以上をもちまして、令和5年度北海道子ども読書活動推進会議を終了させていただきたいと思っております。本日は大変ありがとうございました。